



GIRIBON

GIRL'S MATOMEBON

桃色

大洗女子学園

PINK OARADOSHI





えー
つき見せるの
耻ずかじござすー
+CR+1+2+3+4+5+6+7+8+9+10+11+12+13+14+15+16+17+18+19+20+21+22+23+24+25+26+27+28+29+30+31+32+33+34+35+36+37+38+39+40+41+42+43+44+45+46+47+48+49+50+51+52+53+54+55+56+57+58+59+60+61+62+63+64+65+66+67+68+69+70+71+72+73+74+75+76+77+78+79+80+81+82+83+84+85+86+87+88+89+90+91+92+93+94+95+96+97+98+99+100+101+102+103+104+105+106+107+108+109+110+111+112+113+114+115+116+117+118+119+120+121+122+123+124+125+126+127+128+129+130+131+132+133+134+135+136+137+138+139+140+141+142+143+144+145+146+147+148+149+150+151+152+153+154+155+156+157+158+159+160+161+162+163+164+165+166+167+168+169+170+171+172+173+174+175+176+177+178+179+180+181+182+183+184+185+186+187+188+189+190+191+192+193+194+195+196+197+198+199+200+201+202+203+204+205+206+207+208+209+210+211+212+213+214+215+216+217+218+219+220+221+222+223+224+225+226+227+228+229+230+231+232+233+234+235+236+237+238+239+240+241+242+243+244+245+246+247+248+249+250+251+252+253+254+255+256+257+258+259+260+261+262+263+264+265+266+267+268+269+270+271+272+273+274+275+276+277+278+279+280+281+282+283+284+285+286+287+288+289+290+291+292+293+294+295+296+297+298+299+300+301+302+303+304+305+306+307+308+309+310+311+312+313+314+315+316+317+318+319+320+321+322+323+324+325+326+327+328+329+330+331+332+333+334+335+336+337+338+339+340+341+342+343+344+345+346+347+348+349+350+351+352+353+354+355+356+357+358+359+360+361+362+363+364+365+366+367+368+369+370+371+372+373+374+375+376+377+378+379+380+381+382+383+384+385+386+387+388+389+390+391+392+393+394+395+396+397+398+399+400+401+402+403+404+405+406+407+408+409+410+411+412+413+414+415+416+417+418+419+420+421+422+423+424+425+426+427+428+429+430+431+432+433+434+435+436+437+438+439+440+441+442+443+444+445+446+447+448+449+450+451+452+453+454+455+456+457+458+459+460+461+462+463+464+465+466+467+468+469+470+471+472+473+474+475+476+477+478+479+480+481+482+483+484+485+486+487+488+489+490+491+492+493+494+495+496+497+498+499+500+501+502+503+504+505+506+507+508+509+510+511+512+513+514+515+516+517+518+519+520+521+522+523+524+525+526+527+528+529+530+531+532+533+534+535+536+537+538+539+540+541+542+543+544+545+546+547+548+549+550+551+552+553+554+555+556+557+558+559+560+561+562+563+564+565+566+567+568+569+570+571+572+573+574+575+576+577+578+579+580+581+582+583+584+585+586+587+588+589+590+591+592+593+594+595+596+597+598+599+600+601+602+603+604+605+606+607+608+609+610+611+612+613+614+615+616+617+618+619+620+621+622+623+624+625+626+627+628+629+630+631+632+633+634+635+636+637+638+639+640+641+642+643+644+645+646+647+648+649+650+651+652+653+654+655+656+657+658+659+660+661+662+663+664+665+666+667+668+669+670+671+672+673+674+675+676+677+678+679+680+681+682+683+684+685+686+687+688+689+690+691+692+693+694+695+696+697+698+699+700+701+702+703+704+705+706+707+708+709+710+711+712+713+714+715+716+717+718+719+720+721+722+723+724+725+726+727+728+729+730+731+732+733+734+735+736+737+738+739+740+741+742+743+744+745+746+747+748+749+750+751+752+753+754+755+756+757+758+759+760+761+762+763+764+765+766+767+768+769+770+771+772+773+774+775+776+777+778+779+780+781+782+783+784+785+786+787+788+789+790+791+792+793+794+795+796+797+798+799+800+801+802+803+804+805+806+807+808+809+810+811+812+813+814+815+816+817+818+819+820+821+822+823+824+825+826+827+828+829+830+831+832+833+834+835+836+837+838+839+840+841+842+843+844+845+846+847+848+849+850+851+852+853+854+855+856+857+858+859+860+861+862+863+864+865+866+867+868+869+870+871+872+873+874+875+876+877+878+879+880+881+882+883+884+885+886+887+888+889+890+891+892+893+894+895+896+897+898+899+900+901+902+903+904+905+906+907+908+909+910+911+912+913+914+915+916+917+918+919+920+921+922+923+924+925+926+927+928+929+930+931+932+933+934+935+936+937+938+939+940+941+942+943+944+945+946+947+948+949+950+951+952+953+954+955+956+957+958+959+960+961+962+963+964+965+966+967+968+969+970+971+972+973+974+975+976+977+978+979+980+981+982+983+984+985+986+987+988+989+990+991+992+993+994+995+996+997+998+999+1000

今回はじめての総集編に挑戦しています。
なんだと思われるかもしれませんが、結構手直し
入れているので新鮮な気持ちで楽しんでいただけるかと
思います。
本当はガルパン本全部入れたかったのですが、途中から
フルカラー作品で、そんな印刷のプラシはなかったため
断念。カラー総集編は次の機会にします。

ちよこ

桃色大洗女子学園

ええーっ!!

桃色大洗女子学園

ちよつと

会長!!

ゴリ

何ですか!
この制服は!

ポヨニ

えー

いいじゃん

ドヤ

モグモグ

みんな
似合ってるよ

嬉しく
ありません!

いやあ

オオオオ!

また学園存続の
危機でさあ

オオオオ!



分かりました

お金があれば
いいんですね

というわけで
手っ取り早く
風俗で稼ぐ
ことになったから

みんな
がんばってね

会長！

西住が
死んだ魚の眼を
しています！

いつもの事だ
ほっとけ

ガッ

こうして大洗女子の
風俗店が
開店したのである

桃色大洗女子学園

JOEL

ワイワイ

ガヤガヤ

百年戦争はメルキア群を
脱走したときには
休戦となっていた

それから半年
群の目を逃れ
俺は大洗の街に
紛れ込んでいた



混沌とした街で

時折
無性に人恋しくなる



ミホ

いらっしやい
お兄さん
お気に入りの子は
いましたか？

ああ

要するに
女遊びが
したいのである



ミホちゃん
ご指名です

いらっしやいませ

何だこの子は……

顔は可愛いが
嫌々オーラMAXだ……
何か事情があるのか？



は
はい……

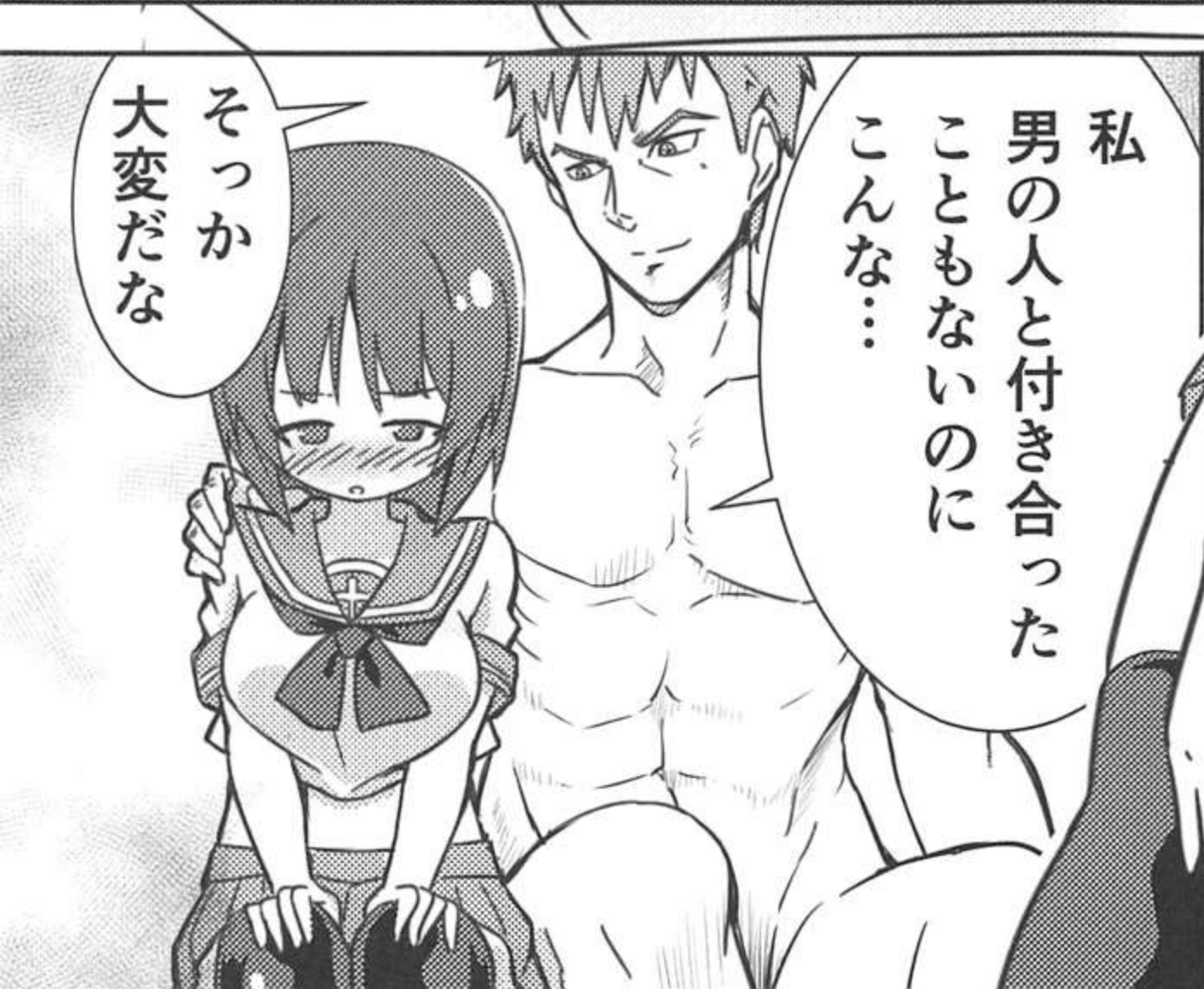
ミホちゃん
こういう店で
働くの初めて？

しかし
そういう女に
性の喜びを教えるのも
また一興



私
男の人と付き合った
こともないのに
こんな……

そっか
大変だな





んむ

!!



でも大丈夫
ゆっくり
慣れていけば

ほら
こっち向いて



キスってこんな
にキモチいいんだ...



キス.....
しちゃった...



だって...

胸が...
変...っ

ビク

何が嫌なんだい？

ふにゅ



ダメ.....
今おっぱい
触られたら.....

やっ

よかった
胸から離れた...

っで

あれ？

身体じゅう

ピリピリする.....

ピッ

何これ.....

ジュ



あっ！

そこはっ！

ジュ





あああ

だめえ!

ぐちゃぐちゃ

そんなところ
いじったら

ピクッ

ピュ

ピュ

ピクッ



そんなこと
ないだろ

感度のいい
女の子って
可愛いと思うよ

もう
お嫁にいけません
っ!

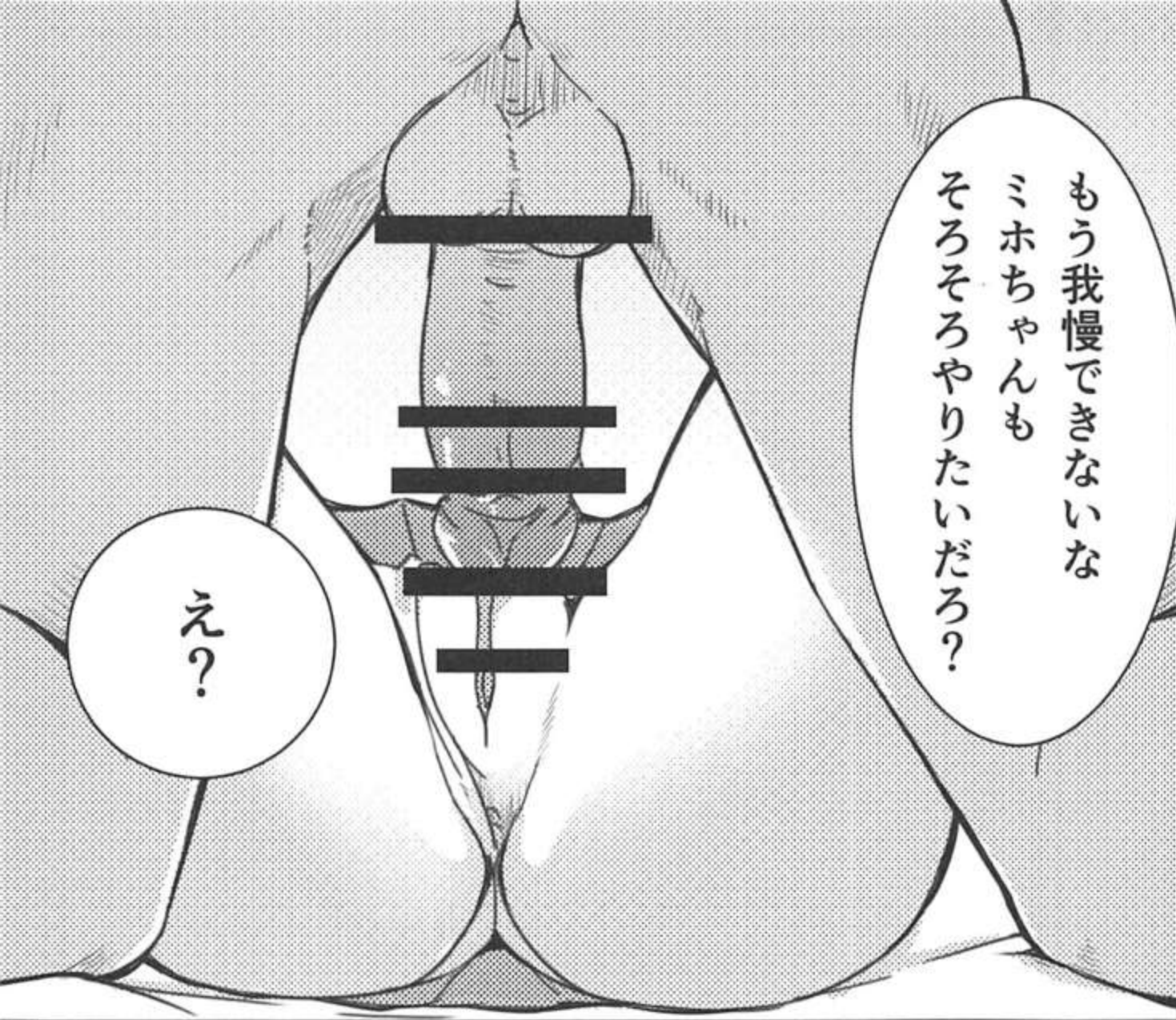
わーん



おっと

潮を噴いて
しまったか

ジュロロ...



もう我慢できないな
ミホちゃんも
そろそろやりたいたろ？

え？



証拠に
ほら

俺のチンコが
こんなに反応してる



したい……

何で？

この人のおちんちんが
こんなに欲しいの？



あつ……
ええっ？

私……

今からセックス
しちゃうの？





NO!

本番は
ダメです!

はっ

本番

セックス

おちんちんを入れる



え?
?



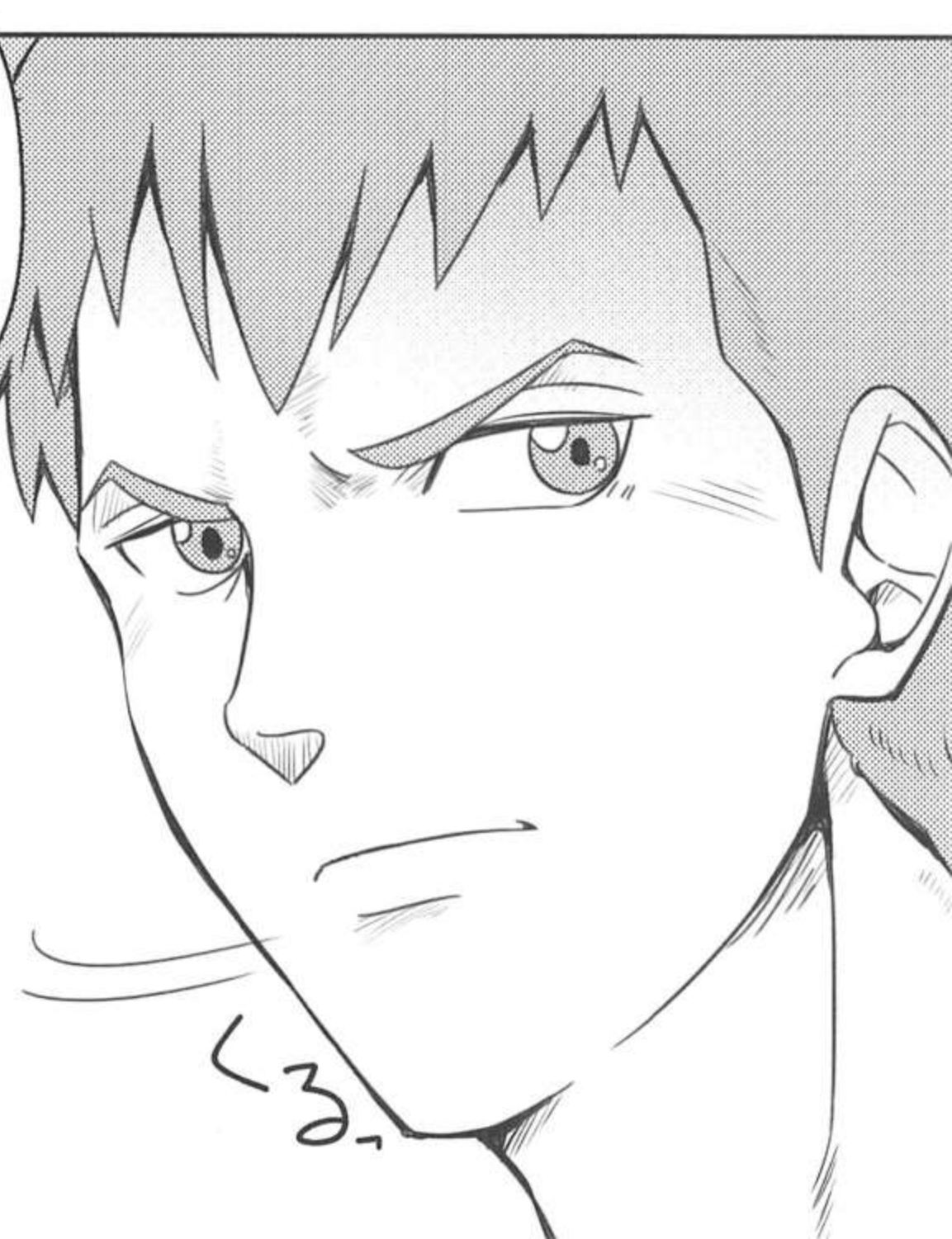
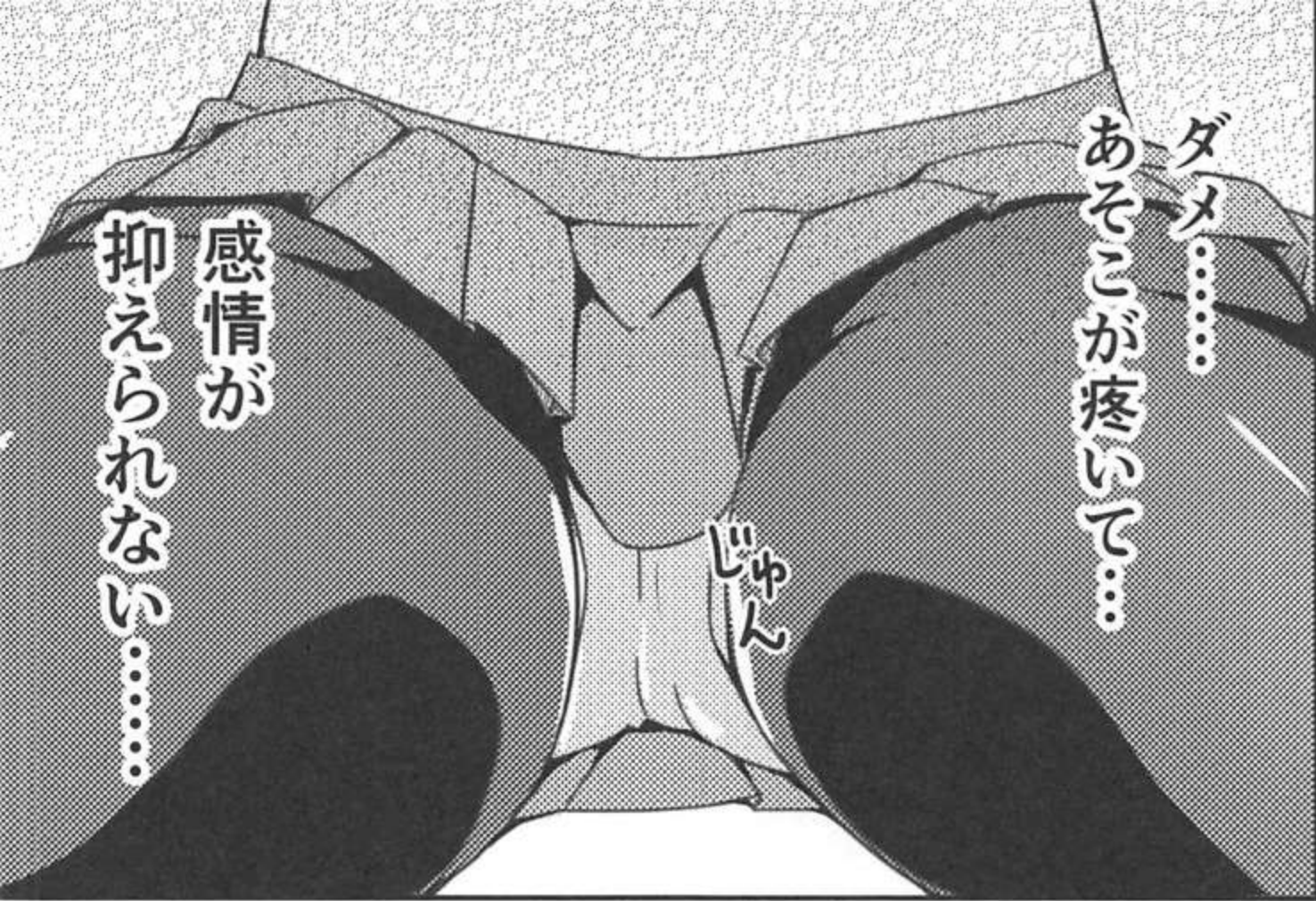
そうか……

じゃあ帰るかな



俺は本番以外
興味はない……

他に良い所
探すよ



あなたの
おちんちん

私に
入れてください

ひゃっ！

おちんちんで
返事しないで
ください！

そうか？

あっ…
おちんちん
入ってくる…

じゃあ
行動で
示さないとな

くちゅ

ムキムキ

ゴッ

ブツ



あー

あー

ス!!

ズッ

あー

あー

アッ

アッ

ス!!

ス!!

激しいっ
私の中ズンズン
突かれてるう！

ズン

ズン

たゆん

たゆん

ズンズン

にゅん

コン

にゅん

ひやあ！
おく……
奥に来たあ！

ズン

待ってください！
何か変ですっ！
これ以上は……

あわ

ダメだ！
もうイクぞ！

ええっ!?

あわ

ビュ
ビュ
ビュ

何ですかこれ!?
あったかいのが
入ってきてっ!

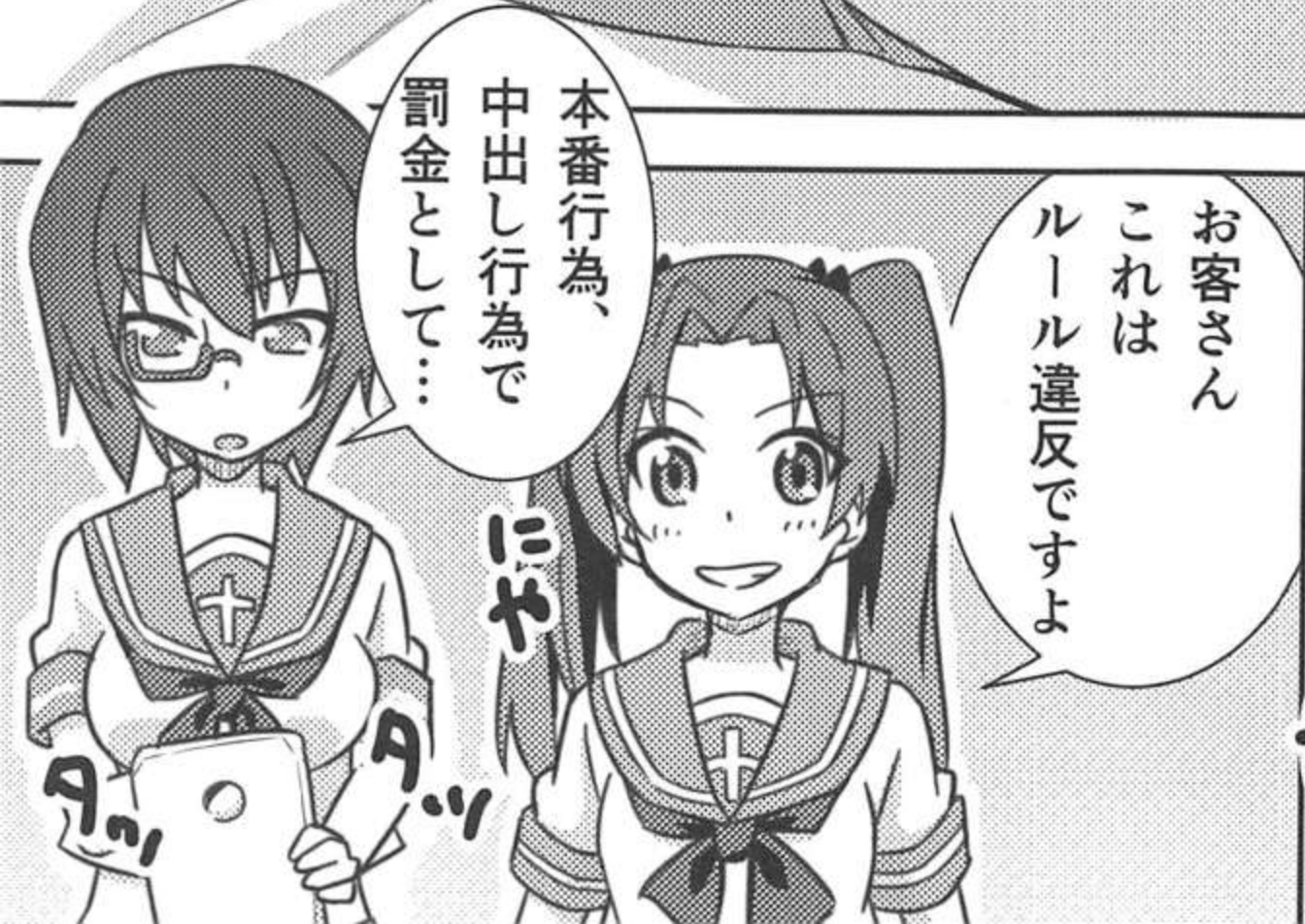
あ

キモチいいのが
弾けてますう!

ビュ

あ

ビュ



100万円!?

締めて
100万円になります

1,000,000			
AC	+/-	%	÷

ギョーン

カッ

払えないなら
警察に電話するしか
ないですねー

わーっ!
警察だけはっ!

すちゃ

こうして
客を騙し続け
金を稼いだ
大洗女子は
無事廃校を
免れたという

私の処女…
金儲けに
利用されて
消えた……

るー





躍動するトニーおじさんC95サークルカット

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止



会長の私生活

設定画『用務員のオジサン』

大洗女子学園で働く用務員のオジサン。
昔、軍隊でエースパイロットだったらしいが、
敵のオカルトめいた攻撃になすすべなくやられ
大洗の地に逃げ延びた。





会長!

キー
コン

♪

あの…

今日一緒に
帰りませんか?

ごめんねー

今日は用事が
あるんだー

またですか?

最近……
会長は放課後
用事ばかりですね…

まあ
会長にも色々
あるんだろう
けど……

フッ…



学校の友達…
やけに親しそう
だったな……
付き合ってるのか？

はあ……

ぐちゅ ぐちゅ

え？
女の子だよ？



ほた…

最近は……

ぐちゅ

はあ……

百合ってのが…
流行ってるらしい
から……



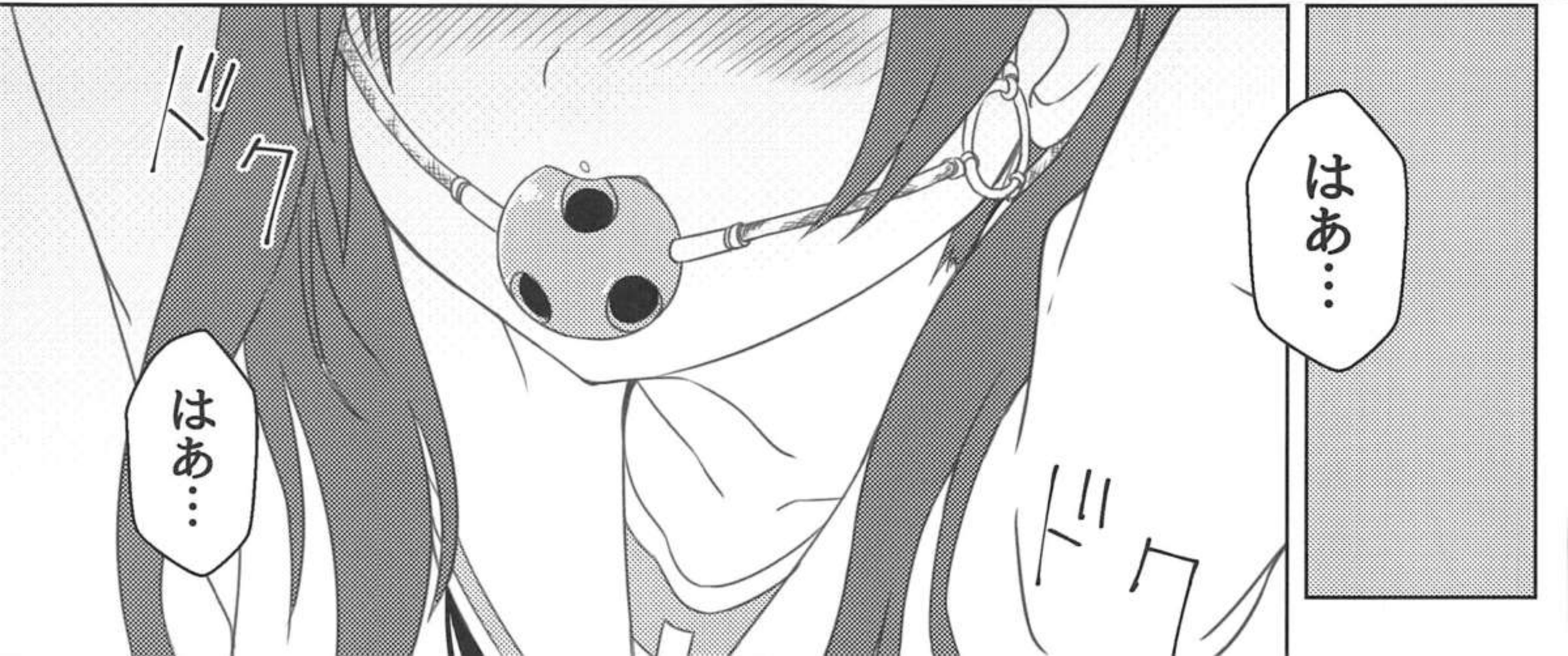
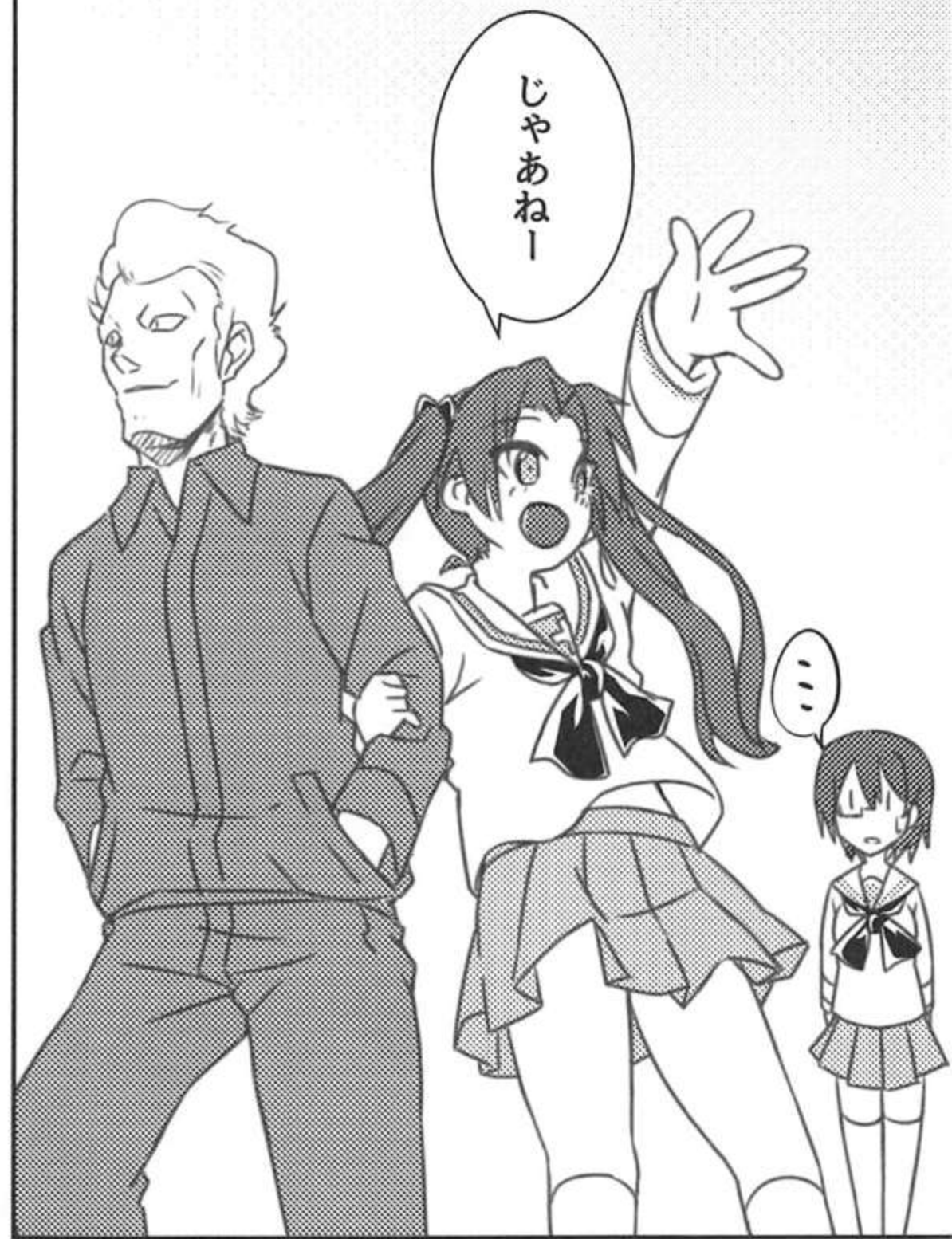
なっ！

ぐちゅ

ひあっ！









杏……

なぜ…
俺との関係を
隠そうとした？

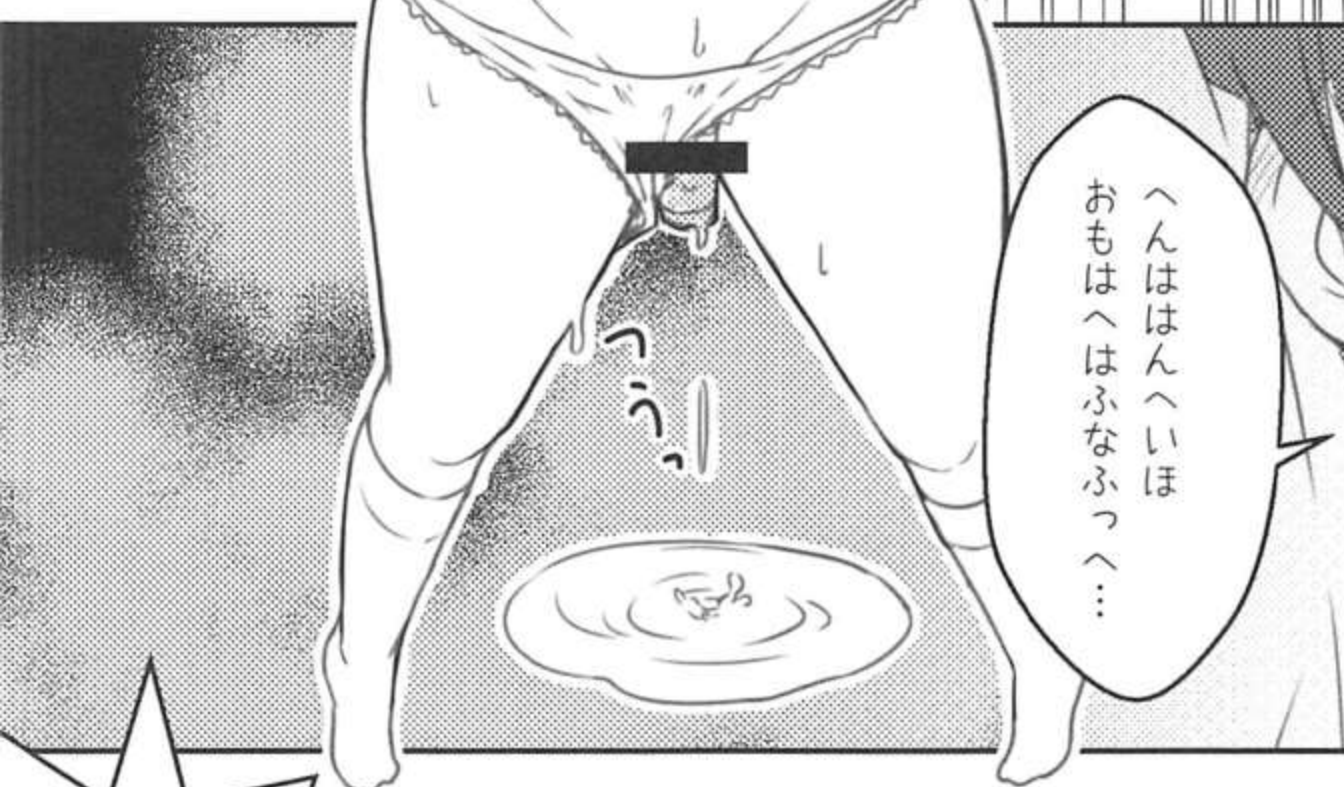
はあ……

ほへは……

おあ……

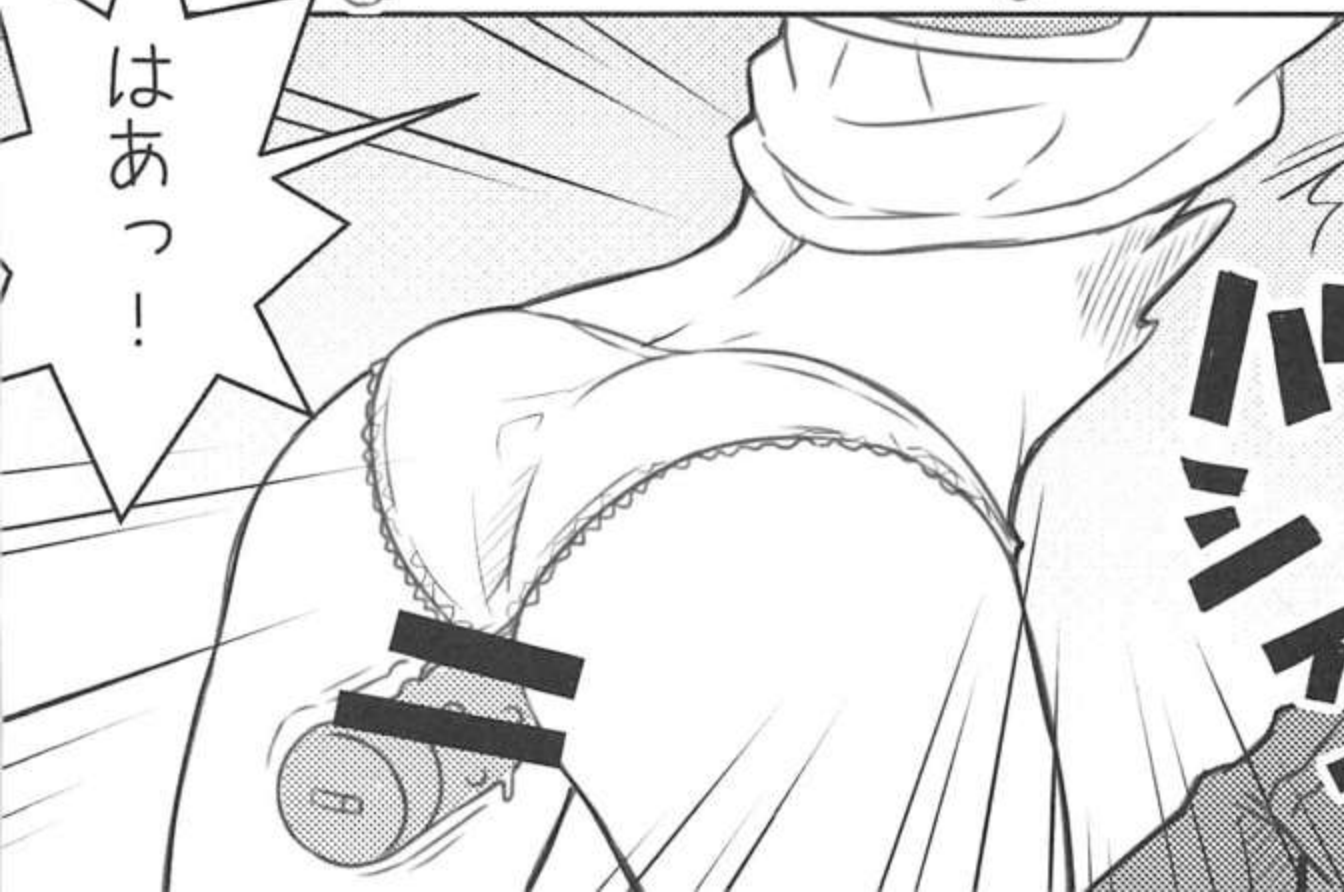


ガッ
ガッ
ガッ



ガッ
ガッ
ガッ

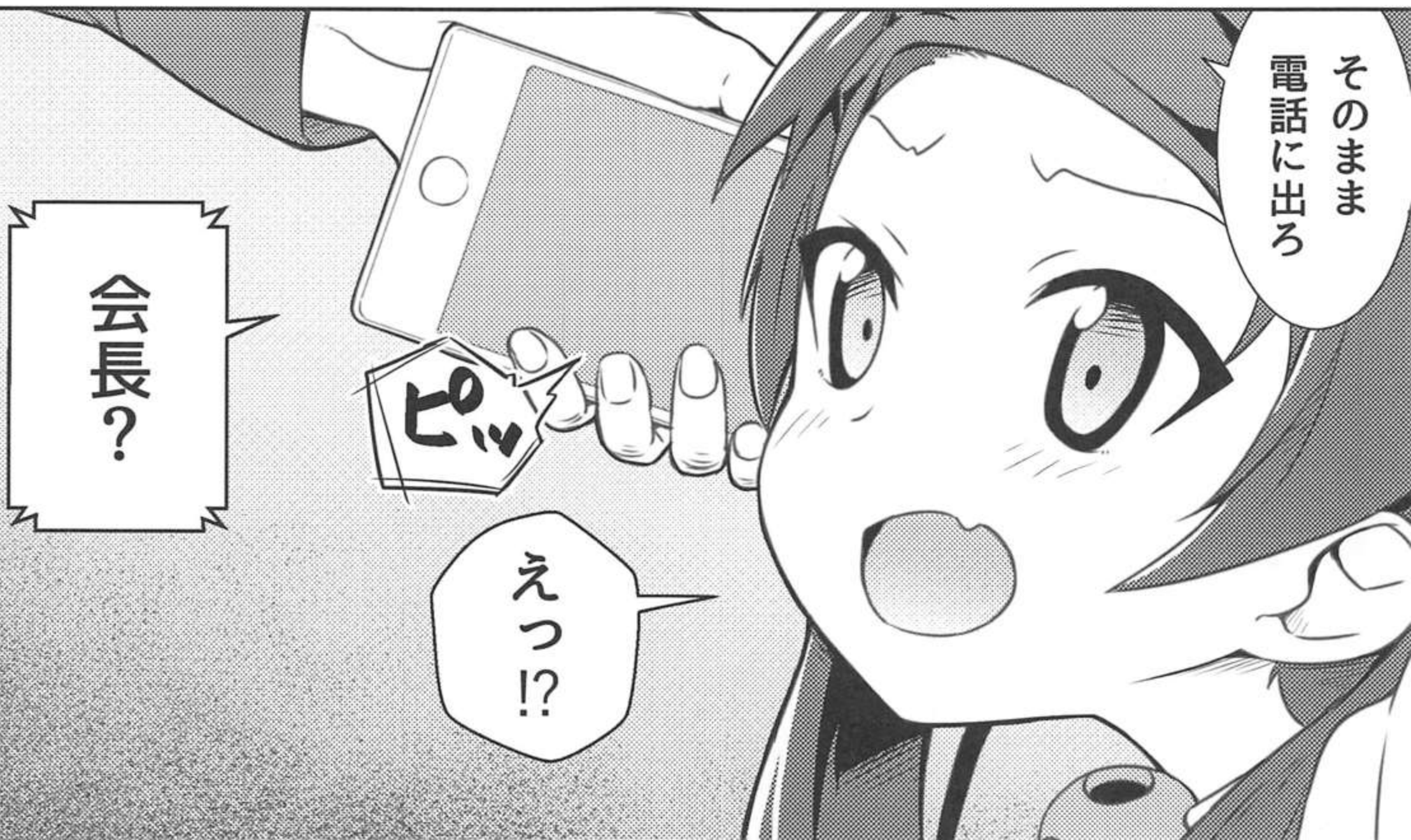
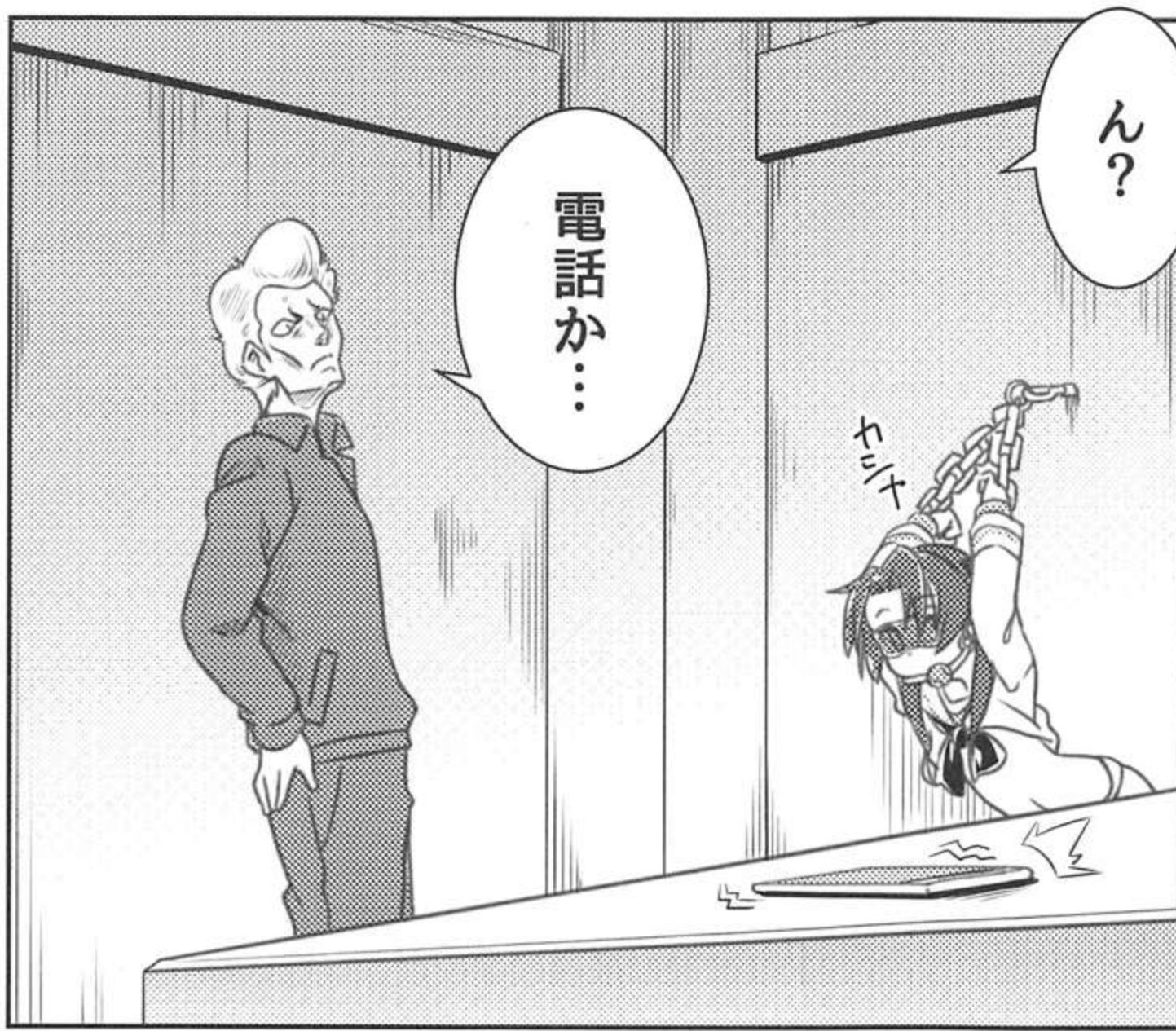
へんははんへいほ
おもはへはふなふっへ……



はあ……

バ
ニ
ス
ク

はっきり
しゃべらんか！





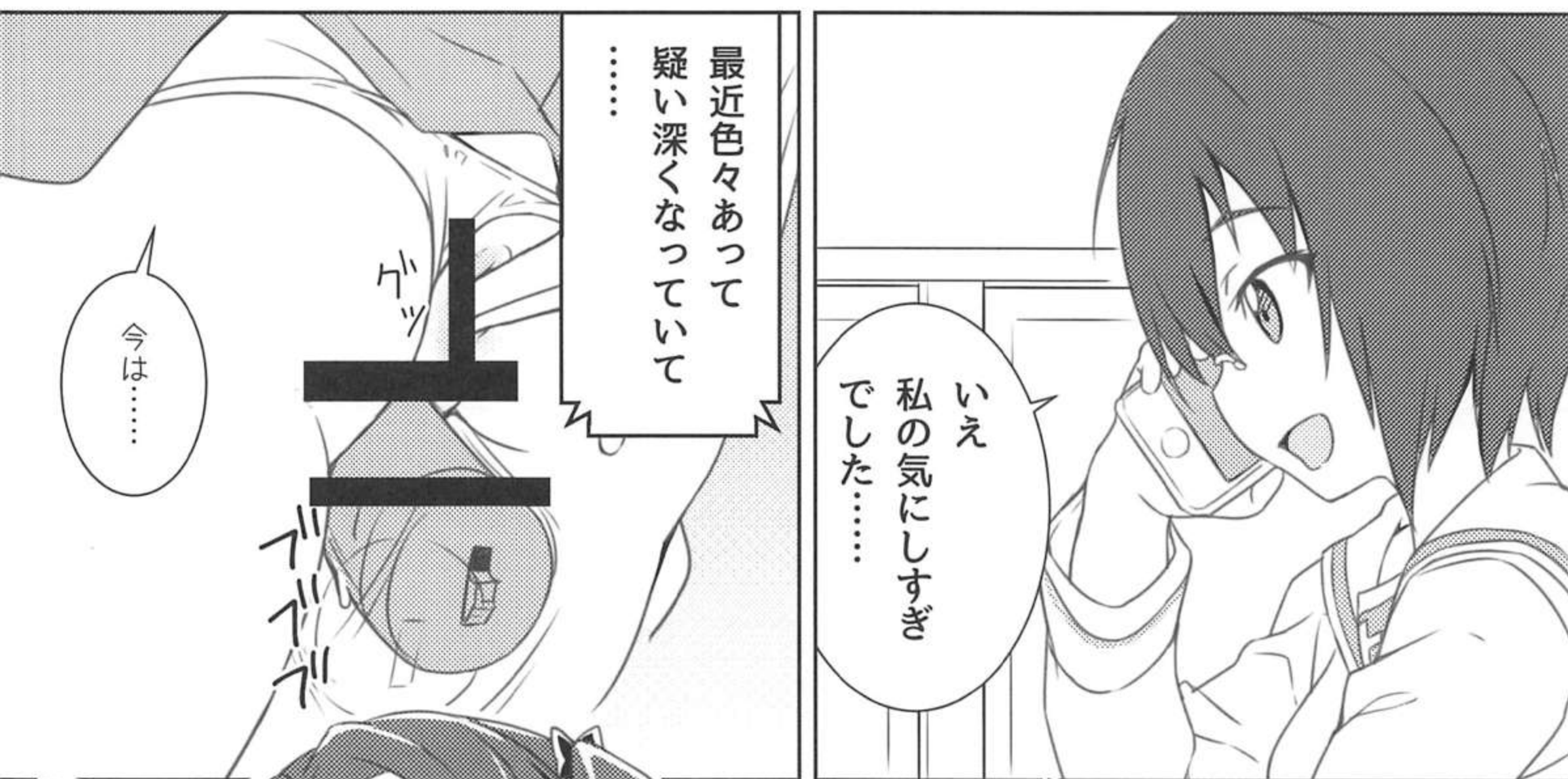
突然
すみません

先ほど様子が
変に見えたので
気になって……

ごめんねー
急いでだから

何もないって
………

ちよつと変に
見えたかな？



いえ
私の気にしすぎ
でした……

最近色々あって
疑い深くなっていて
………

今は……



だまあ

ビクーン



!?

会長!?

どうしたんですか？

いやあ

ちよつと干芋
落としちゃってさあ

ゴク

ゴク

もう……

会長は
そそっかしいん
ですから……

お
と

プシ

新しい干芋
買いに行くから
切るね

分かりました
それではまた
明日……

ハハッ……
危なかったな

はあ



急に素直に
なりやがって

この淫乱女め

クク...

はっはっ



もう……
らめえ……

ほあ
おちんちん
欲しいよお

ほあ

普通の女が

こんな

フェラ上手かよ?



それは

……

はっ

はっ

はっ



淫乱じゃ
ないよー

ほあ

ほあ

はっ

こんなにされて……
女の子だったら
普通耐えられない
……

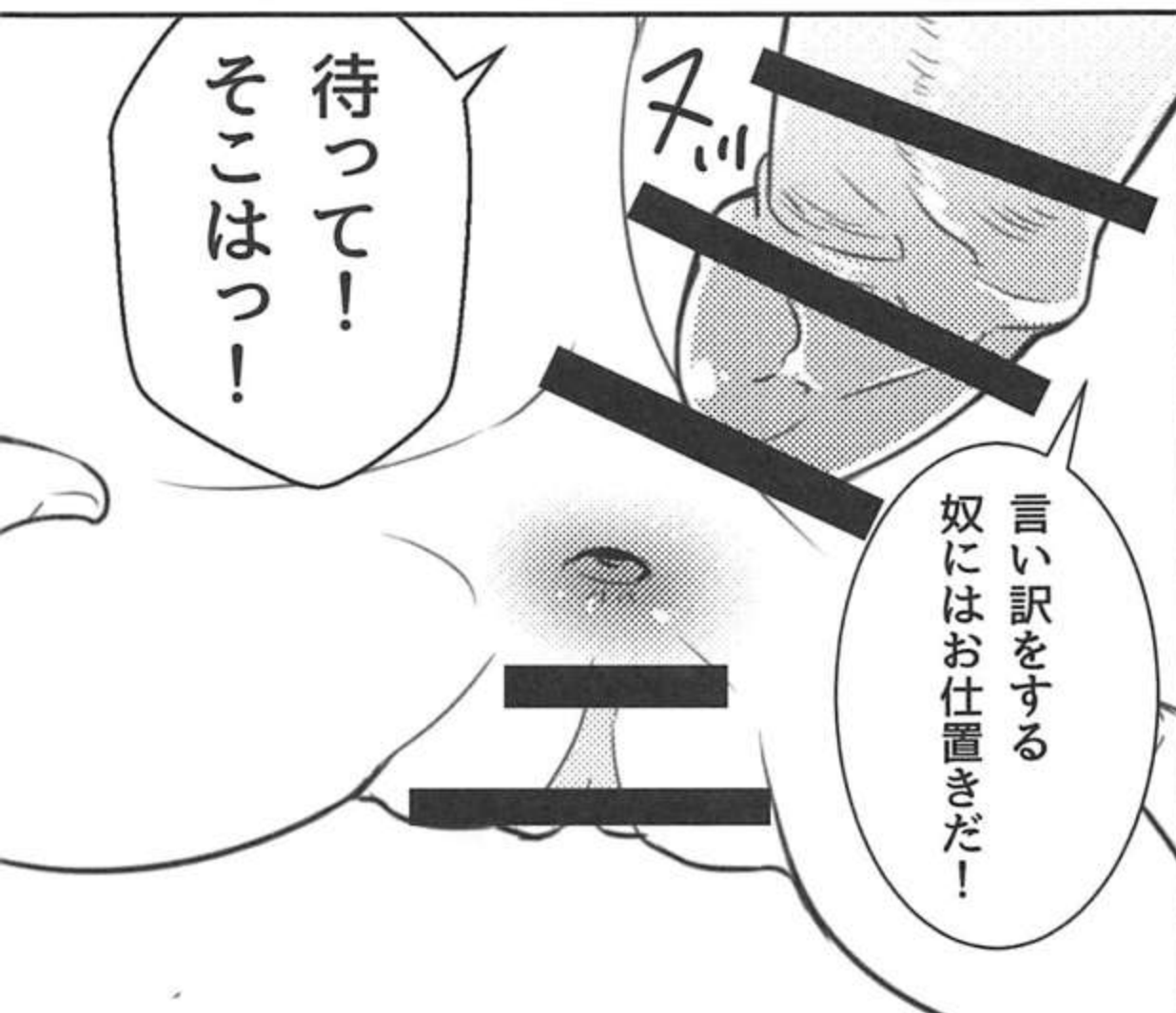
うっ……

いいぞそろそろ……



ちゅほ

ちゅほ





はあ
あん♡

ゴリル

たっ...

ゴキョ

オシリの穴に
おちんちん
入っちゃってるっ！

ズ
ズ
ズ



だめだめっ！

はっ

はっ

ズ
ズ
ズ

ばかになりゆう！
アナル覚えたら
学校でも
オジサンおちんちん
欲しくなっちゃうっ！

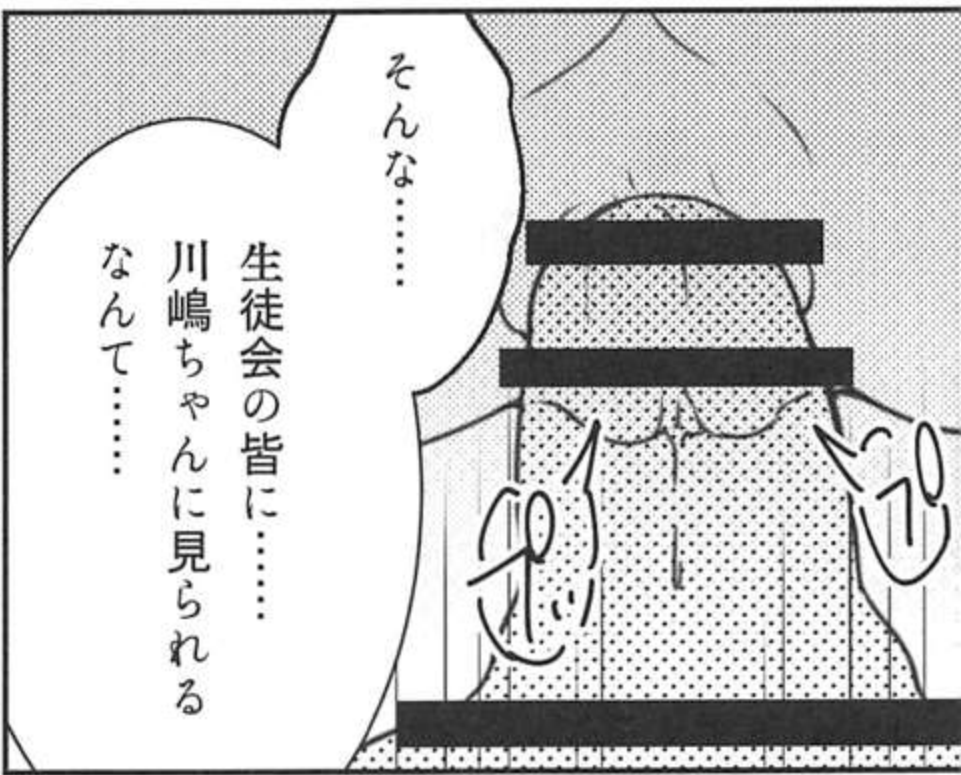


最高っ!



それはいいな

明日学校で友人に見せてやろうか...



そんな...

生徒会の皆に...
川嶋ちゃんに見られる
なんて...



はあっ

はあ、



はあ
赤ちゃん
できちゃう
はあ

結局朝に
なってしまった
.....

どろろ



その後も私は
オジサンと
セックスしまくり
.....



会長に
呼び出されて
来たけど.....

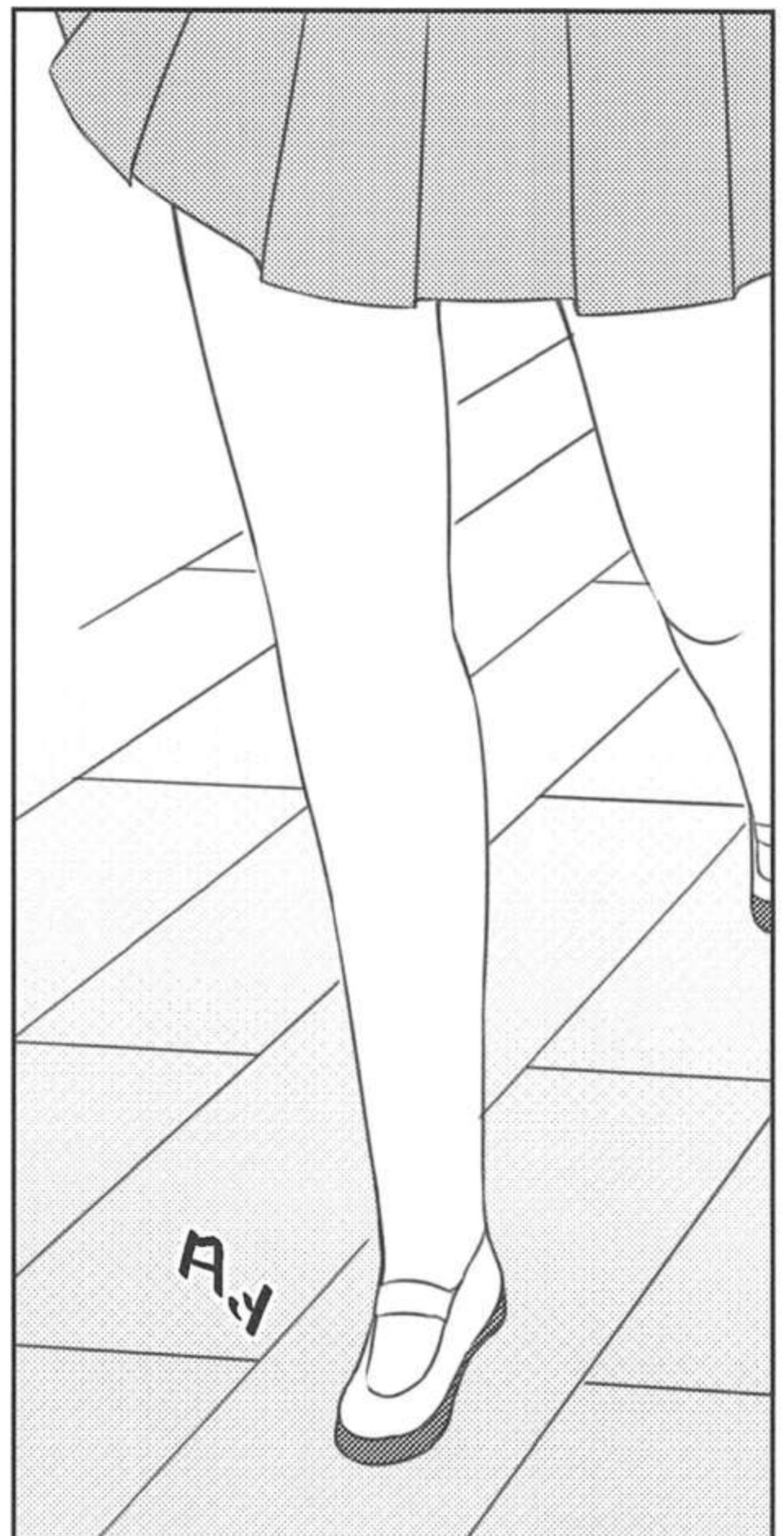
見せたいものって
なんだろう？

うーん



失礼します...

コンコン



タッ



昨日のオジサンと
私の関係……

はあ……

はあ……

ホントの事を
伝えておきたくて



あ
川嶋ちゃん

ゴメンねー
忙しい時に……

えっ？



私たち
付き合ってるんだ
……

ちゅっ。



よろしくちゃん

はあ……



毎日セックスで
忙しいから
もう生徒会も戦車道も
止めるね

はあ……

G I R L P A N
FUTURE II



少し未来の話である。大洗女子学園の黄金世代が、戦車道で華々しい活躍を見せてからそれなりの年月が経った。大洗の街でも、何かの節に彼女らの勇姿が語られることはあるが、さながら宝来の玉の枝のごとく、語る者も事実か分からぬ伝説と化していた。

もしかしたら、伝説を嬉々として語る人々の、いつの日か、あの伝説をこの目で見られればという思いが溢れ、街を覆っていたのかもしれない。

あの日あの時、あの青春の熱気が、今一度起ころうとしていたのだ。

それは大洗商店街の真ん中にある、門構えの立派な料亭の中で始まった。

そこでは、青春が全く似つかわしくない、薄汚い初老たちの怒号が飛び交っていた。

「今更みほを連れてくるとはなんだっ！」

「まほが家を継がぬというならば、我々分家にお鉢を回せば良いものを！」

老夫婦が恨み節を浴びせる。だが、その矛先の女性、西住しほは顔をビクリとも動かさず冷やかな視線を送るばかりだった。

「継がぬとは言っておりません。まほの身辺に整理がついていないだけです」

まるで政治家の言い訳のごとく上っ面な説明に老夫婦の怒りは増すばかり。見かねた別の分家の女性がフオローに入る。

「ですから、私どもが自由の身であるみほさんはどうかと提案したのです」

物腰は柔らかいが、表情からは一步も引かぬ強い姿勢が見える。

しばしにらみ合う両家。それに挟まれて、渦中のみほとまほが居心地の悪い表情で座っていた。と言っても、二人の様子は対照的。顔を下に向け、まるで自分が悪いかのように落ち込むみほ。対して姉のまほは、巨大で獰猛なマンモスすら凍り付かせる氷河期のごとく冷たい目を、何処ともなく遠い場所に向けていた。

どれくらい時間が経ったのだろう。先ほど出されたデザートのアイスが溶けていない様子を見ると、さほど長い時間は経っていないはずなのだが、そこにいた面々には人気がニメの最終章製作が発表されてから公開されるまでの長い長い年月のように感じられた。

このペースで制作されると最終話は一体何年後になるのやら。期待して待っている我々はおろか、監督すらも寿命で死んでしまうのではないかと不安がよぎる。

閑話休題、この時間が永遠に続くのではないかと皆が案じている中、意外にも、語気を荒げていた老夫婦が、これ以上話にならないと悟り、ため息をついてこの冷戦を終わらせた。

「我が家に継がせてもらうつもりで来ましたのに。とんだ無駄足でしたわね」

「帰らせてもらおうか」

話を通らないならば、交渉自体をなかった事にすれば良い。厭味ったらしく大きめの音を立てて老夫婦が席を立った。

当然、しほがそれを許すはずなかった。

「家元を決める際は一族全体の承認を受けるのが掟でしょう！」

「反論もできず本家の決定に頷く事が掟ですか？ 傲慢だったら！」

老夫婦から日ごろの怨み辛みが溢れ出す。本家だ分家だと時代錯誤なルールに縛られ、何度チャンス逃してきたことか。家を継ぐことができないのなら、新しい事をさせてくれれば良いものを、家の名を汚すなど束縛される。分家は本家の下女下男なのか。

今この時も、正当な後継ぎ候補が乗り気でない状況で、一度勘当したはずの妹を連れてきて、決して分家に家元を渡そうとはしない。強欲で、傲慢で、こんこんちきのすつとこどっこいだ。

老夫婦が、心の中で罵詈雑言を叫んでいると、最長老の前家元がゆっくりと口を開いた。

「ともかく、今回は皆さまそれぞれ思う所があるようですので、子供ら二人の試合により、勝った方を家元とする次第です」

最長老の言葉にも不満の様子を見せる分家の代表たちに、しほが加えて言う。

「姉というだけでこのまま家元にして、まほをドイツリーグから引退させるのは西住家全体としても痛手のはずです。かと言ってわけもなく妹に後を継がせることは掟に反する。なればこそ……」

そこに分家へ譲らない説明はなかった。だが、今は本家に従うしかない。不満はあれどどっぴり浸かってしまったシステムをすぐに抜け出す用意などできてはいないのだ。

分家の女性は不満顔のまま椅子に腰を下ろした。

「しかしねえ……」

2

西住家のお家騒動を遠くに聞きながら、二十代後半の麗しき乙女五名が事の成り行きを見守っていた。お待ちかね、元あんこうさんチームの沙織、優花里、華、麻子の面々である。加えて愛里寿の姿も見える。

高校時代とは見違えるように落ち着きを見せる乙女たち。華が部屋にあったポットを使ってお茶を入れ、皆の前へ置いていく。それぞれ軽く礼を言って受け取り、ズズツとしお茶の味を噛みしめ、心を静かに保つ。しかしそこは、女三人寄れば姦しいと言うもので、久しぶりに会った盟友と話したい事が溢れ出さんばかりに、うずうすと口が開きかけている。ただ、大人になって皆が変わっていたら、自分だけが喧しくしてしまっただろう

しようという不安が、言葉を唇の一手手前で何とかせき止め、喉の奥に引っ込めていた。

だが、その結界が解けるのは容易かった。興奮を隠しきれなかった優花里が、ついに口を開いたのだ。

「いやあ、皆さんご活躍のよう。同級生として鼻が高いであります」

皆の澄ましていた顔が、フツとほどけて笑顔になった。流れに乗って沙織が続ける。

「華、見たよ。華道と戦車道を両立する美人家元って、テレビで引っ張りだこだよ」

「オリンピックの後に見世物にされただけですわ。華道もありますので、私はプロではありませんし……」

華が皮肉を言って謙遜した。が、浮ついた声のトーンから嬉しさがにじみ出ている。

「そこ行くとやっぱり愛里寿ちゃんよね。プロリーグMVPで日本代表でもエース指揮官なんだから」

急に話を振られた愛里寿は隣にあったクッションをギュッと抱き、恥ずかしそうに顔を伏せた。

「そんなことない。自衛隊と日本代表を両立させてる優花里の方がすごい……」

話を逸らそうと優花里の名前を出す。果たして、一同の視線は油断をしていたモサモサ頭に集まった。

「ええ？ 私がですかあ？」

「そうだな。日本代表で一番目立ってる。……トーク力で」

「冷泉殿〜！」

麻子の悪態に優花里が泣きすがるように訂正を求める。こうしていると高校時代が数日前のように感じられ、皆の声にも心なしか、若々しさが蘇ってきているようだ。

「沙織さんと麻子さんですよ。大洗女子で教師をやりながら後輩に戦車道を教えてるんですよ？」

沙織と麻子を見る華。

「いつの間にか超名門」

愛里寿の控えめなトーンで語る賛辞は何よりも名誉なことに感じられる。

「ええ〜？ そんなことないよ〜」

まんざらでもなさそうな麻子の沙織は、くねくねと身体をよじらせた。麻子は気持ち悪そうに沙織を見つめるばかりである。

「でもやっぱり……」

華が上手く声で誘導し、皆の注目を扉の方へ向ける。

サツと扉が開き、みほの姿が見えた。予想以上に注目を集めたみほは、状況が読み込めず、はわはわと慌てるばかりである。

「やはり、一番の出世頭は、みほ殿ですよ〜」

「よっ！ ドイツリーグMVP！」

優花里と沙織が盛大に御輿を担ぐ。

「元だよ〜」

訂正しながらみほは考えていた。本当に自分の選択は正しかったのか。ドイツリーグを辞めてからというもの、いつも世間からバカにされているようで、硬かったはずの信念が砕けそうになっていた。

しかし今、心の通い合った友の言葉に、何よりも励まされたような気がする。最初はいじられているのかとも思ったが、彼女らには、全くその気がないようにだ。MVPを取ったこ

とには変わらない。それが何年昔の話になろうと、名誉が霞むことはないのだと。そして、自分の行動は、その名誉を汚すようなことは一切してはいないのだと。そう言ってくれていると思うのは、考えすぎなのだろうか。ただ、旧友の皆はいつでも自分の味方でいてくれるのは確かな事に思えた。それだけで、救われたような気がした。

3

華に入れてもらったお茶を飲みながら、しばしの間、身に降りかかった難儀を忘れ、同窓との再会を愉しんでいた。

「いやしかし、去年のみほ殿引退劇には本当に驚きましたよ〜」

「その後、世界の子供たちに戦車道の楽しさを教えるため旅をするっていうのは結構……」

「アレですわよね〜」

「ふええ……」

皆の言葉に困り顔をするみほだが、ほのかに笑顔を含ませているところを見ると、本気で困ってはいないようだ。

みほの脳裏に去年の事が鮮明によみがえる。

それはドイツでMVPに輝いて次のシーズンだった。チームは前年優勝で活気づき、その年の名立たるルーキーを巨額を使い根こそぎ獲得していた。みほたち前年メンバーを黄金世代と呼び、第二の黄金世代を育成する先行投資だとかなんとか。口では立派な計画を打ち出していたが、実態は無計画な青田刈り。急増したメンバーをフォローできるだけのコーチ数は保持しておらず、即戦力と謳われたルーキーたちも所詮は学校を卒業したばかりのシロート。テレビ映りを気にした運営が無理矢理、各車輻一名の新人を投入してしま

い、シーズン開幕から三連敗を喫していた。監督は運営から強いプレッシャーを受け、作戦は日に日に強引に。みほたちも何度か意見をしてみたが、聞き入れてもらえないような状況ではなかった。

そのプレッシャーは新人にも伝播。まだ二十歳にもなっていない若者たちは焦り、ミスが増えてさらに焦るといふ悪循環に陥っていた。

そして、その時は来た。ある雨上がりの試合中、勝負を焦った新人が、みほの命令を聞かず危険な行為に走り、生身で砲弾の爆風を喰らってしまった。

幸い、死者はいなかったものの、数名が全治二カ月程度のケガをし、シーズン戦績は絶望的となった。

みほはメンバーを助けられなかった自分を責めた。そして、高校時代から変わらず、危険なルールを改善しようとし、戦車道連盟の体制への憤りを感じ、プロを引退することを決めたのだった。

そして考えた。戦車道をどうにかもっと健全なものにできないかを。結果、出した結論が、『世界中の子供たちに戦車道の楽しさを伝える活動をする』というものだった。

世界中の子供たちが戦車道を愛せば、人々が考え始める。『これは本当に子供たちに見せ

「いいものか」を。要するに、コンプライアンスの強化が始まる。そうすれば、戦車道界に蔓延る危険な思想が、ガイダンスの実施やルール改変によって変わっていくのではと。直接戦車に乗るだけが戦車道ではない。戦車と共に、自分の信じる未来へ進み、その後ろにできるのが戦車『道』なのだ。昔の偉い人が言っていた気がする。

みんなと違う荒地地に進むのは勇気がいる。だが、誰かがやらなければ、そこに道はできないのだ。

そんな気持ちを察してか、愛里寿が優しく微笑んだ。

「みほは間違っていない」

「島田はみほに心酔しすぎだ」

「悪いですか？ みほは私の全てなので」

麻子の言葉に張り合って、愛里寿はみほの腕に身を寄せ、見せつけた。優花里が不思議そうな顔を向ける。

「昔はライバルと言っていたような……？」

「昨日の敵は今日の友です」

旧友との再会をしばし楽しんでたみほだが、ハッと言わなければならないことを思い出して手を叩いた。

「ともかく、みんな今日は来てくれてありがとう」

もう高校を卒業してからかなりの年が過ぎたというのに、皆は急な召集に応じてくれた。それぞれ、何かしら生活の事情があるはずなのに、誰一人として渋る仲間はいなかった。

今も、皆、笑顔でみほを見つめている。

「構わん」

「みほが困っているならいつでも駆けつけるよ」

「であります！」

みほの瞳が潤んでしまう。最近年を取って涙もろくなったかなと、おどけて見せたが、若くても泣いていただろうなと心の中で思った。自分は変わらないのに自分を取り巻く環境はドンドン変わっていつてしまう。

今回もそうだ。心境を察して華が同情する。

「ですが、大変ですわね。私も家元になるときはそれなりに悶着がありました……」

「家元になるにはあの、決して褒める所のない殿方と結婚しなければならぬとは……」

優花里がしかめっ面を見せた。皆の頭の上に、男の姿が浮かぶ。少々薄くなった髪を整えることは全くせず、パンダナを額に巻く。肌には最高の土壌を用意してデキ物を育てている。メガネは度がきつくと、目の周りが歪んで見える。フレームサイズは全く顔に合わせておらず、放漫な頬肉に食い込ませている。服はチェックのシャツだが、色のバランスが滅茶苦茶で、一体このデザイナーが制作すればこんな服ができるのかある意味気になるデザインである。下にはタツクの入ったストリートジョーンズで、裾上げに失敗したのか、どんな体制でも足首の部分が露出して、学生のように白いソックスが覗いている。

想像するだけで、彼のいつでも荒々しい息遣いが頬を掠めるような、不快な錯覚に陥る。沙織がゾゾツと鳥肌を立てて身をよじった。

「まほさんじゃなくても絶対無理！」

「みほが勝つてもあの太つちよと結婚するのか？」

皆の辛辣な評価を聞いて、流石に可哀そうに思ったが、フオローを入れてあげられるような気分でもなかった。みほは苦々しい笑顔で首をひねった。

「うーん、どうだろう……？」

「絶対ダメ」

愛里寿が真剣な表情でみほの腕を握った。

「ダメと言っても、ウチの連中なら押し切るだろうな」

入口の方から声が聞こえた。感情を見せずいつも冷静なトーンの声を、皆は知っている。「まほさん！」

「準備が整ったそうだ。みんなには……せっかく集まってもらったのに汚れ役のようなことをさせてしまったって本当に申し訳ない」

まほが深々と頭を下げる。皆、見たことのないまほの姿に慌て、席を立った。

「頭を上げてください。お二人のためならばどんな役でも引き受けるつもりであります」

「うんうん」

優花里と沙織がまほの方にそっと手を乗せる。軽く頭を上げたまほは、皆を見渡した。

「みんな……」

「さ、面倒事はさっさと終わらせよう」

麻子がスツと歩き出し、部屋の扉を開けた。皆もそれに続く。

「試合が終わらなければ何も始まりませんからね」

「家元になったって、結婚は断ればいいのよ」

「しきたりなんて糞くらえであります」

みほはなんと頼もしい仲間を持っているのだろう。少し羨ましく思いながら、まほは皆の後姿を見つめて微笑んだ。

対比的に、後ろに立っていたみほは、神妙な表情を浮かべていた。

「お姉ちゃん。ちょっといいかな？」

4

中庭を囲むように置かれた板張りの廊下。料亭の屋根の隙間から陽が漏れ、ちょうど小さな池の水面を照らしている。池から反射した光が散らばり、料亭の壁をキラキラと照らしているのが妙に美しく感じる。鹿威しに絶え間なく組み上げられる水の音、時折竹が動き、こおんと静寂の中を鳴り響く。この光景に少しくらいは心が落ちつけられたが、今回の騒動の前では、焼け石に水というものだった。

まほを覗き込むようにみほが尋ねる。

「お姉ちゃんはこの試合、勝ちたいの？」

「そんなことを聞いてどうする？」

「どうって……」

言葉に詰まった。もし、まほがどちらか本音を答えてくれれば、みほはそれに合わせて戦おうと思っただが、こんな時に限って姉は真面目なのだ。

「どんな状況であろうと、負けることは許されない。それが西住流だ」

「……そうだよ」

どこかの政治家風と言えば付度だろうか。みほ自身、汚い戦車道を嫌っていたはずなのに、己の都合で八百長をしようとした自分を恥じて肩を落とした。

「いや、すまん。そうではないんだ」

「え？」

まほが誤解を招く言い方をしたと気付く、ハツとした顔で慌てる。どうやらみほの考えを責めていたわけではないようだ。

「みほは西住流の後を継ぐのは嫌か？」

「そんな……」

ブンブンと頭を横に振って否定する。今までいろいろあったが、みほは別に西住流が嫌いなわけではないのだ。ただ、まほが望むのならば自分は身を引こう、まほが望まぬならば、自分が後を継ごう、そう考えていた。

「では、あの男と結婚するのは？」

どうかと問われて嬉しいと答える女性はいないだろう。容姿がどうこうではなく、見ず知らずの男性とこれからずっと生活することは不安しかなかった。ただ、姉にそんな結婚をさせるくらいなら、自分が人身御供になっても良いと、そう思っていた。

「つまり、その……、どっちがいいか考えても決められないのなら、お互い全力を尽くして戦って、その結果に委ねてみないか？」

「！」

当事者の想いを蔑ろに、無理矢理試合で後継ぎを決めようとしている事に、甚だ不満を持っていた。しかし、どちらに転ぼうと善し悪し両方あるのなら、己の技に運命を預けるのも悪くはない。結局、それが西住流の後継ぎを決める最良の方法なのだ。

「私たちの青春を全て注いだ戦車道だ。きつといい方向に導いてくれるはず」

みほの心にかかっていた霧が取れ、晴れ晴れしい笑顔が覗いた。

「うん、そうだね。お互い、悔いのないように、全力で」

「ああ」

互いに合点がいったらしく、うり二つの顔が、天使のように微笑み、向かい合っていた。

5

大洗市役所の前で、まほが指揮を執るティーガーのゴウゴウと唸るエンジン音が響い

ていた。その向かう先に駐車場に沿ってS字カーブが伸びている。そのS字カーブの向こう、片道2車線の広い道、県道2号線に突き当たる部分で、元あんこうチームのIV号戦車D型(H型仕様)が砲身をティーガーに向けて横向きに止まっていた。

ティーガーの頭の蓋がバカリと開き、まほがニユツと顔を出す。IV号戦車を中心に周りを見渡し、何やら考え事をしてるようだ。

「しかし、なんで大洗なんかで試合を？ あっちのホームじゃないですか」

操縦手がニユトラル状態でクラッチを入れたり外したりしながらぼやいてる。その後ろで腕を組んでじっと開始を待っていた逸見エリカが口を開いた。

「隊長の圧倒的勝利を演出するために、あえて敵の有利な条件でやろうという話だ」

「エリカ、私はもう隊長ではない。まほでいい」

「！ は、はい！ まほ様！」

「……様？」

エリカが顔を恍惚にして呼ぶ。当のまほは何故様付けで呼ぶのか分からぬ表情で、エリカの気持ちなど、一つも理解していない。一体エリカは何年実らぬ想いを寄せているのだろうと、呆れたような同情のような顔でやり取りを聞いていた操縦手は、居心地の悪さを払拭するように話題を変えた。

「で、どうするんですか？ 黒森峰必勝の電撃戦をかましますか？」

まほが首にかけたマイクで、状況を見つめながら答える。

「いや、ここで前進すれば身を隠す場所が無くなる。いい的だ。この場で建物を盾にして敵車輛を確実に撃つ」

『ヤヴオール！』

元黒森峰の、活気ある掛け声が社内に響いた。

6

ショッピングモールの外れ、芝が生い茂る広場の中で西住一族の面々がパイプ椅子に座り、50インチほどの家庭用テレビを食い入るように見ている。その集団の隅では、愛里寿が『立会人』の札を胸に、静かに見守る。集団の横には国際資格を持った審判員が3人。非公式試合にしては十分すぎるのは、流石西住流の未来を決める試合といったところか。主審がマイクを片手にモニターを見る。

「それでは、西住まほチーム対西住みほチーム。試合開始です！」

ドーンと合図の花火が上がる。本来なら主審の声がスタートの合図なのだが、フィールドの小さいワンオンワンであるため、両者は同時に認識できる方式を採られた。

実際、両者花火の音が聞こえるよりも先、光が見えた瞬間に行動を始めている。

元黒森峰の砲手がサツとトリガーに手をかけ、スコープを覗き込む。そのまま第一射を放とうと人差し指に力を入れかけた所で、目の前の光景に驚き目を見開いた。

元あんこうチームが急速に後退を始め、松林の奥へ隠れようとしている。

「逃がすか！」

ドンと撃たれた弾はIV号戦車の車体をかすり海の方へ跳弾する。焦ったせい、いや、どんな状況にあらうと狙った場所を外すほどシロートではない。

「浅い！」

「すみません……」

近況報告のつもりで叫んだまほの声は、砲手を委縮させてしまった。

「気にするな。すぐに出てくるから照準を外さずに」

「はい」

ハツとしてフォロワーを入れるが、車長としての威厳を損なわぬよう声のトーンは冷静に見せる。自らを助けてもらうために集まってもらった友人たちに、厳しい対応をしなければならぬ状況に心を痛めながら、まほなら威厳などを保たずとも仲間をまとめられるのだから、などと考える。技術だけ言えばまほだろう。しかし、可愛い妹に苦勞をさせたくはない。未だ持ってまほの心情は揺れていた。

「おかしいです。こちらに来る気配がない」

エリカの声に、ハツと顔を上げると、IV号戦車のエンジン音が、交差点とは逆方向の右手側に移動し続けている。道を迂回して回り込むつもりかとも考えたが、試合のフィールド設定は極小、裏側の道に続く経路を通れば、確実に場外で反則負けになる。

「追いますか？」

「待て、畏れかしれん」

不穏な動きに何か策があることは分かるが、どうすればそれをしのげるのか、情報が少なすぎる。下手に動けば相手の思うつぼなのだ。

「くっ……目視しか情報がないなんて久しぶり過ぎて……」

今や元黒森峰のメンバーは、全員がプロリーグの選手。プロでは最先端の戦車が用意されているため、敵の行動は衛星からの情報で全て把握できるのが前提の戦いばかりをしている。今更世界大戦時代のアナログ戦車では、エリカが不安で苛立つのも無理からぬことだ。

「初心に帰った気分が身が引き締まりますね」

「そうだな……」

操縦手とまほは既に開き直って落ち着いている。精神をコントロールすることはプロの素質だが、気分によって勢いをつけるのもまた素質。エリカとまほたちどちらが良いというわけではない。が、この場合冷静になった方が結果的に悪手だったかもしれない。

前方の松がキラリと光る。まほがそれに気付いた時には、松がメキメキと音を立てて割け、砲弾がティーガーを掠めた。

跳弾した弾がまほの横を掠め、ソニックウエーブに思わず手で顔を庇う。

「松の向こうから撃ってきた！」

慌てて車内の窓を覗き込み、状況確認を行ったエリカが叫んだ。

砲手が首をかしげる。

「照準どうやって？」

「まさか、街の形をすべて覚えているのか……？ 全速前進！ この場所では圧倒的に不利だ！」

まほの合図でティーガーのエンジンが唸る。

7

大通りの元あんこうチームは、ティーガーのエンジン音で発砲を止めた。みほは首につけられたマイクを軽く押すと、車内に指示を送る。

「敵が動き始めました。麻子さん、全速で前進！ 華さん砲身を八時に！ 敵車輛が見えた瞬間に発射してください！」

「了解……」

麻子がアクセルを一杯に踏み、IV号戦車がアスファルトを削りながら前進を始める。速度をつけて地面に馴染むような走行を始めると、さらに加速が加わっていく。そろそろ交差点に入り、ティーガーの視界に顔を出す頃だ。

8

前進を始めた元黒森峰だが、S字の道路でさほど加速はできない。もちろんまほたちはそれを承知で、砲塔を常に、IV号戦車が顔を出すだろうギリギリの位置に向けながら移動している。

フツと、IV号戦車の改造された長い砲塔が現れ、砲手がトリガーに手をかける。来い、あちらが停車して狙いを定めた時が合図だ。まるで西部劇のように、早打ちを決めた方が勝者となる。そう砲手は思い描いていたが、時が進むにつれて自分のイメージした位置と、IV号戦車の実際の位置が離れていく。まさか？ 自分が決めつけていた未来の絵が、映画のクロスフィードのように消え去って行くのが分かる。元あんこうチームは止まらない。

「スピードを落とさない！」

「くそっ！」

何故だという分析の前に、まほの合図で弾が放たれる。同時にIV号戦車からも発射される弾。お互いの弾は掠めるほど近くを交差し、互いの敵戦車へ飛んで行く。

ドンッ！ と足元に弾が当たり、履帯の外れたIV号戦車が、転輪をアスファルトに擦り付ける。バランスは完全に失っている。

車内では全員が左右に振られ、優花里の頭が内壁にぶつかった。

「くっっ！」

優花里を労わりたいところだが、今はコンマ一秒の戦いである。沙織が心を鬼にして前を向いた。

「みほ！ 状況は？」

みほの前には発射後の煙が立ち込め、その上からわずかに顔を出すまほと、にらみ合っている。足元では次弾装填の音が聞こえる。次を先に発砲できた方が勝ちなのか。その時サーッと海から風が吹き、煙が晴れてティーガターの姿が見えた。IV号戦車の弾がフロント上部にめり込んでいる。ここまでしても、まだティーガターは健在なのかと、その耐久力に戦慄を覚えた矢先、シユツと車体から白い旗が飛び出した。

みほがゆっくりとマイクに手をかける。

「……ティーガター、大破確認」

IV号戦車の中で、ワツと歓声があがるのが聞こえた。

9

太陽が山の向こうへ落ちかけ、夕焼けが空をオレンジ色に染めている。撃破されたティーガターが、回収車にけん引されて港の方へ連れられて行くその姿は、何処かしよんぼりとして見える。

運ばれていく戦車を横に、みほとまほが互いの健闘を称え、手を握りあっていた。

「負けた、完敗だ」

「そんな。今回は条件が良かっただけだよ」

みほが照れながら言う。謙遜でありながら事実。確かに元あんこうチームのホームと呼べる大洗でこそ成し得た勝利だが、それをやってのける腕を持っていたのは、メンバーがそれぞれの人生で常に戦車道を切磋琢磨していたからだろう。

「まさか、みほが勝利するとはね。これからはあなたが西住流家元よ」

しほが後ろから声をかける。予想通りの言葉を聞き、みほは考えていた言葉を発しようとして、勇気を振り絞るために深い深呼吸をした。

「それは、違います」

みほの言葉にしほの顔が険しくなる。

「あなた、まだそんなことを！」

「みほ……」

まほも、妹の真意がわからず、疑問の表情で見守っている。

「この戦いに勝てたのは、優秀なメンバーと、大洗という地であったからです」

「どんな条件であっても西住流は勝たなければならない」

条件が揃わなければ勝てない者に、西住流家元の資格はない。そう付け加えた。

「もしこの試合が熊本だったら、私は負けていたと思います」

「そんなのは仮定の話……」

「仮定でもなんでも！ 私は今日の条件以外で、お姉ちゃんに勝てる自信はありません！」

「私だって、みほに勝てる自信はない……」

それでは勝利したみほが西住流を継がない理由にはならない。

「だったら、この試合で常に勝つ西住流は証明されていないんじゃないですか？」

まほを否定するための言葉が、みほにも当てはまる。強い方が家元、しかし強いとは何か。元々数学の証明のように家元を決める話ではないが、通りが通らないのもまた事実。

「方便ですが、間違ってもいいないね」

みほ派の分家が後押しをする。

「そんなわがままをっ！」

しほがヒステリックに叫ぶ。このままでは感情論になってしまうと悟ったまほが、さすが二人の間に入った。

「みほは西住流を継ぎたくないのか？」

「そんなことはない。ただ、こんな形で決めるのは間違っていると思う」

それでは何のためにこの試合を行ったのか。結果が出てから嫌だと言っては、ただ、駄々をこねているだけだ。言われるがままにやってきたが、しかし、やはり何かがおかしい。まほと戦車を交えてみて、改めて感じた。

「あなたがどう思おうが、すでにこれだけの事をしつらえているのよ！ 今更撤回ができませんか！」

「お母さん……」

「みほ、あなたが家元よ」

しほが厳しく言い聞かせる。本当はこのようなゴタゴタを一族の前で見せたくはなかった。これでは後から何を言われるか分からない。そんな焦りが、しほを一段と苛立たせるのだ。強引に話の決着はついた。西住家の皆がそう感じたその時、思わぬところから声が届いた。

「ちょっと待ってください！」

立会人の札をつけたままの愛里寿がしほに近づき、皆の視線が一気に集中する。

「あなた、島田さんの？ みほが家元になることがそんなに反対ですか？」

「いいえ。そこに異議はありません」

「愛里寿ちゃん？？」

てっきり擁護してもらえるのだと思っていたみほが驚きの表情を隠せないでいる。

「ただ、みほが悩んでいるのは結婚です。あんな男と結婚するのは私も反対です」

愛里寿の言葉に、一同の注目が今まで誰も気にしなかった、家元の許婚の男に集まる。男は言われ放題だが誰もフォローをししてくれず、がっくりと肩を落とす。

「しどい……」

「しかし、跡取りの予定が無くては家元を継がせられません」

しほの言葉を待っていたかのように、愛里寿がニヤリと笑う。

「だったら、私が結婚します！」

「ふえええ？」

もちろん愛里寿は女の子である。学生の頃ならまだ、女装男子であってもさほど違和感のない顔つきであったが、成人した今となっては立派な淑女であり、到底男でしただと言

オチはつかない。みほが驚きと戸惑いで目を回していると、腕にギュッと抱き着いてこういうことですよと見せる愛里寿。

これには、遠くから見守っていた元あんこうチームの面々も驚きを隠せず、皆顔を真っ赤にしている。

「ひどいですよ、みほ殿！ 私というものがありません！」

優花里が遊び捨てられた女のようにわあわあ喚き、まあまあと沙織が止めている。一体みほと優花里の間に何があったのだろうか。おそらく何もなかったのだろうが、優花里にとっては何かあったのだろう。人間関係というものは難しいのだ。

愛里寿は優花里を無視して、しほの方を見つめる。

「今の科学技術なら、試験管やらDNAやらで私とみほの子供だって作れるはず。だったら、西住家は島田と血縁を結んだ方が得だと思いませんか？」

「なるほど。その手があったか……」

ボンと手を叩く母に、みほが涙を流す。

「お母さんく！」

まだ納得のいかない様子のみほを愛里寿が見上げ、泣きそうな顔をして聞く。

「みほは、私の事嫌い？」

「嫌いじゃないけど……」

みほの言葉を取ったとばかりに、しほがすかさず話を取り仕切る。

「ならば決まりのようね。みほは島田愛里寿さんと結婚し、西住流家元を継ぎます！ 異議のある方は挙手を！」

「こんなに良い話、反対するやつがいるか？」

「むろん、異議はありません」

西住家の面々が深く頷き賛同する。

「うむ」

まあも、これがベストな解決だとはかりに、大きく頷いた。

「そんなく！」

大洗の空に、みほの空虚な叫びが響いた。

10

こうしてみほは愛里寿と結婚し、西住家を継いだのであった。しかし、一人納得のいかないもじゃもじゃ頭がいた。

「自分はまだ認めていませんよ！ あの泥棒猫！」

結婚式の帰り、引き出物箱をぐしゃぐしゃに握りながら優花里が叫んだ。

「まあまあ……」

「二号さんがみつともないぞ」

沙織が慰めようと思った矢先、麻子が火に油を注ぐ。華はというと、ニコニコと笑顔で

ノーコメントを貫くのみ。

「誰が二号さんでありますかー！」

麻子を追いかけ優花里が走る。このメンバーなら、こんな学生の頃のノリをずっとやっていけるかもしれない。それは何より幸せな事だと、元あんこうチームの面々は思うのだった。

「強引に綺麗な終わり方にする気ですかー！」

「やれやれ……」

麻子のため息が、六月の空に消えていった。

おわり

■あとかき■

今回はじめての総集編をさせていただきました。
収録マンガが3,4年前の作品なので気になるところがライクマウンテン。
タイムが許す限りメニープレイス修正入れました。
元の作品と見比べられるピープルがいたらレッツトライ。
大分グッドにリメイクされてると思います。

実は今までの全ガルパン本を収録しようと思っていたが、
印刷的にモノクロとカラーの折り合いがつかず、
今回はモノクロ作品だけとなってしまいました。
カラー総集編は次の機会をお待ち下さい。

■収録作品■

- 桃色大洗女子学園(コミックマーケット91刊行)
- 会長の私性活(コミックマーケット93刊行)
- GIRL PAN FUTURE(コミックマーケット96刊行)

発行：鯖DOWN

発行日：2019/12/28

印刷：株式会社 栄光 様

発行者；食鯖獣(sabakui@gmail.com)

鯖 sabaku project
"fulfills your life..." DOWN